

004 NOV. 2005

#### Contents

ジャーナル「ジェンダー&セクシュアリティ」発刊	<del></del> 1
CGS からのニュース	2
日本からのニュース	<del></del> 4
アジアからのニュース	<del></del> 6
コラム	8
Journal Launch: Gender and Sexuality	1
News from CGS	2
News from Japan	<del></del> 4
News from Asia	<del></del> 6
Column	8

# CGS Newsletter

国際基督教大学ジェンダー研究センター Center for Gender Studies International Christian Univiersity

181-8585東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB301 tel & fax: 0422-33-3448 cgs@icu.ac.jp http://subsite.icu.ac.jp/cgs/

ERB 301, 3-10-2 Osawa Mitaka Tokyo

181-8585 Japan

tel & fax: +81-422-33-3448

cgs@icu.ac.jp http://subsite.icu.ac.jp/cgs/

2005年11月30日CGS Newsletter編集委員会発行

# **▽ジャーナル「ジェンダー&セクシュアリティ」発刊にむけて**

二年目を迎えた ICU ジェンダー研究センター (CGS) では、ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』を毎年 12 月に発行することになりました。CGS 設立当初の三つの目標は、①アジアの研究者・活動家のネットワーキング、②日本の情報を世界に発信する拠点作り、③自然科学を含んだジェンダー研究の発展です。CGS ジャーナルの発行はこのような活動の中核を占めるものです。

ジャーナルは二部構成で、前半の研究部門は、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的調査研究や理論的考察など研究論文や書評に、後半のフィールド部門は、活動家によるケーススタディや国内外のジェンダー関連活動報告など、実践の場での情報提供にあてられます。昨年からの国際ワークショップ「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー」でも実践しているように、CGSでは、ジェンダー・セクシュアリティ研究をエリーティズムに陥らせず、理論と実践、研究者と活動家を積極的に橋渡ししていくことが重要と考えています。当事者の経験を共有し、それを元に知的想像力を用いることは、より深い理論枠組みの構築を可能にします。また理論の汎用性を現場において試すことも必要です。CGSジャーナルは研究者や活動家に、そのような理論と実

# Journal Launch: *Gender and Sexuality*

The inaugural issue of the CGS journal, *Gender and Sexuality*, is set to be launched in December. Now approaching its second anniversary, the Center for Gender Studies (CGS) was initially established at ICU in 2004 with the following three objectives: 1) to create networks among researchers and activists throughout Asia; 2) to build a vital hub from which to disseminate information from Japan to the world; and 3) to develop and promote gender research across a wide variety of disciplines including the natural sciences. The annual publication of *Gender and Sexuality* will form the focal point of our activities in the fulfilment of these aims.

The journal will be comprised of two parts - the first section will consist of empirical research and theoretical studies of gender and sexuality; the second section will relay information from the field, including case studies by activists as well as reports on gender-related activities in Japan and abroad. CGS shirks elitism and endeavours to serve as a bridge between theory and practice, researchers and activists. We are committed to this goal in all our activities, as illustrated at our first International Workshop last year, "Human Security and Gender in Asia." Sharing real-life experiences with people, and using this as a base upon which to exercise our intellectual powers, makes it possible to build a truly meaningful theoretical framework. Moreoever, the applicability of our theories must also be tested in the field. *Gender and Sexuality* is designed to

践の協働作業の場を提供し、日本そしてアジアから世界に向けて情報を発信し、「知」の創造の場となることをめざしています。

今年度の論文募集は終了しましたが、来年度発行予定 02 号掲載の論文募集締め切りは 2006 年 9 月末日を予定しています。執筆要項は以下の URL (http://subsite.icu.ac.jp/cgs/pdf/guideline.pdf) を参照してください。基本使用言語は日本語と英語です。

また、CGS 主催 2004 年度国際ワークショップ「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー」のプロシーディングを創刊準備号 00 号として発行しておりますので、以下のURL (http://subsite.icu.ac.jp/cgs/pdf/journal00.pdf) でご覧ください。ジャーナルの掲載論文等は、ジャーナル配布後随時、PDF ファイルで CGS のホームページで公開いたします。

このジャーナルにおいて活発に議論が展開されることを 心より期待し論文の投稿をお待ちしております。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510012j.html CGSセンター長:田中かず子

bring together researchers and activists for theoretical and practical collaboration, and to disseminate information from Japan and Asia to the world. It is our hope that this journal will become an innovative, dynamic forum for challenging existing concepts and stimulating lively debate.

The language of the journal is Japanese or English. The preparatory issue, vol. 00, consists of the proceedings of the



Gender and Sexuality 01

2004 CGS International Workshop, "Human Security and Gender in Asia," and can be viewed online: (http://subsite.icu.ac.jp/cgs/pdf/journal00.pdf)

Calls for papers for the upcoming inaugural issue, vol.1, have closed. The deadline for applications for the next publication, vol. 2, is scheduled for the end of September. Further details are available online: (http://subsite.icu.ac.jp/cgs/pdf/guideline.pdf)

We eagerly await your submissions. After publication of the journal, all papers will be posted in PDF format on the CGS website.

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510012e.html

CGS Director: Kazuko Tanaka

# CGS からのニュース

## 特集:IWS2005

去る9月16日から18日、 まだ夏の暑さが残る中、CGS 主催による第二回国際ワーク ショップが ICU 構内にて開催 されました。今年のサブテー マは「アジアにおけるジェン ダー表象」。日本全国からはも ちろん、中国、韓国、フィリ ピン、タイ、マレーシア、イ ンドネシア、ベトナム、イン ドからの参加者が集まり、活 発な議論を繰り広げました。 3 日間の会期中、私たちはジェ ンダー表象をさまざまな角度 から取り上げることをめざし



IWS 2005 (1)



ました。各企画へ多くの学生が参加、アカデミックなディス カッションの他に、フォーラム・シアターという聴衆参加型 演劇の試みや、映画監督を招いての上映会とトークなども行 いました。特に3日目の「アジアン・フィルム・ショーケー ス」では、日本、ベトナム、韓国、中国から5作品を上映し、 三鷹市をはじめとする近隣都市より一般の方にも多くご来場 いただくことができました。この企画だけでも総集客数は 200名を超えました。アカデミックなだけの、大学内部で閉 ざされたワークショップにしたくないという CGS の方針が 実を結んだものと、感謝しております。ご来場・ご協力くだ さった方々に厚く御礼申し上げます。

発表からは、アジアにおける急激な経済発展がもたら した新旧価値観の相克が見えてきました。伝統的な宗教を基 盤とする価値観と、物質主義的な享楽社会の価値観の狭間 で、人々は揺れ動いています。日本におけるジェンダーフ リー・バッシングもそんなゆれ戻しの一つと見ることができ ます。アジアの女性芸術家たちはそんな中で、よりフェアな 表現を目指して活動をしており、そこから全く新しい価値観



IWS 2005 ③



IWS 2005 ④

も育ちつつあります。歴史や 文化の違いによって見えにく くなっていたそのような共通 点が、このワークショップで ははっきり浮かび上がってき ました。

アジアでのジェンダー研究 者のネットワーク作りという 面でも、このワークショップ は大きな成果を挙げました。 それぞれの国のジェンダー研 究は、その国独自の問題を抱 えております。それぞれ欧米 との交流はあっても、アジア 内での連携は非常に少なかっ

たのが現状です。このワークショップでは、私たちが互いの 文化事情をいかに知らないできたかを知ると共に、情報を分 け合い助け合う可能性も見つけることができました。今後と も、参加してくださった方々との交流を続け、未来の協働関 係を構築していきたいと考えております。また大学関係者の みならず、多くの方に興味を持ってご参加いただける企画を 今後も考えていく所存です。どうぞご協力お願いいたします。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510002j.html 国際ワークショップ 2005 コーディネーター: 生駒夏美

# News from CGS

## **FEATURE: 2005 International Workshop**

The second CGS International Workshop was held at ICU in the lingering heat of the Japanese summer from September 16 to 18. This year's sub-theme was "Gender Representation in Asia". We welcomed scholars and activists from all over Japan and many other Asian countries, including China, South Korea, the Phillipines, Thailand, Malaysia, Indonesia, Vietnam, and India.

The workshop was designed to explore the issue of gender representation from a variety of perspectives. Apart from academic discussions, the three-day programme also included an innovative "Forum Theatre" with audience involvement, as well as film screenings featuring talks and panel discussions with the directors. CGS actively encouraged student participation and endeavoured to make the accessible to everyone, not just academics. Our "Asian Film Showcase" of five films made in China, Korea and Vietnam, particularly attracted public interest and was attended by an audience of over 200 people, many of whom were members of the general public from neighbouring areas.

The reports and discussions revealed how rapid economic development in Asian countries has led to a conflict between old and new values. People in Asia are in a state of limbo between traditional cultural/religious values and the materialistic values of

modern hedonistic society. The so-called gender-free bashing in contemporary Japan can be seen as one example of this wavering of values. It is under such conditions that women artists throughout Asia are engaged in a struggle for fair expression and are creating an all-new value system. The workshop highlighted the common problems we share, which are so often camouflaged by differences in our history and culture.

Another goal of this workshop was to create a network of Asian gender researchers. Gender studies in each Asian country has their own particular concerns. Yet, in terms of interaction, we have all generally tended to look to the West rather than to each other. This workshop made us realize how little we know of our Asian neighbours. It also paved the way for the creation of a new kind of networking system by showing us the potential of information exchange and co-operation. We look forward to building on the relations established with the participants of the workshop in the near future.

We would like to thank all of you who helped to make the workshop a success. CGS will continue to plan new and interesting ways to attract people from all walks of life to gender issues. We truly appreciate your continuing support.

> full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510002e.html 2005 International Workshop Coordinator: Natusmi Ikoma

### 上野千鶴子講演会

2005年5月27日(金)、ICUにて、東京大学大学院人文 社会系研究所教授上野千鶴子さんの講演会が行われた。上野 さんによれば、ネオ・リベラリズムの言う自己決定には大 きな罠が潜んでいる。優勝劣敗の原則の下にすべてを自己決 定・自己責任の結果とみなし、人々を競争させるものである かぎり、その競争についていける人とついていけない人との 格差をどうしても広げてしまうということ。そしてその競争 自体がそもそも特定の人々(ここでは特に女性)にとって不 利に出来上がっているということ。しかしこの罠はすでに全 社会に張り巡らされていて逃げ場はない。では私はどうすれ ばいいのか?これに対して上野さんは「わたしは生きていく のに人の助けがいります。だから助けてください。でもだか らといってなぜ自分であなたの言うことを聞く必要がありま すか。私は私の自己決定をします」という二十四時間要介護 の人の言葉を紹介された。あんなに違和感を覚えながら、「一 人じゃ無理なんだから、助けを求めて何が悪い!?」といえ なかったのは多分、"自立"への根拠のない信仰心のなせる 業だろう。あんなに毛嫌いしておきながら、深いところでは ずっとネオ・リベの自己決定・自己責任に膝を折ってきたの

だ。今回の講演では"知って" いるだけだったことがこんな 風に"腑に落ち"たりできるの だと感じることができた。こ のまま思考停止に陥らないた めにも、やっぱりジェンダー を研究しようと思う。



なお講演の内容は CGS Online (http://subsite.icu.ac.jp/ cgs/article/0510013j.html) で公開されている。

> 全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510003j.html ICU 大学院生:鈴木直美

### 山内俊雄講演会

2005年6月6日、埼玉医 科大学学長であり、日本にお ける性同一性障害の治療に大 きな貢献をしてきた山内俊雄 さんが「性同一性障害を通し て性を考える」と題した講演 を行った。性同一性障害とは、



自分が男/女であるという自己意識が、身体の生物学的性と 一致しない状態にある疾患である。山内さんは、性同一性障 害の成因とその日本での経緯、そして現状について説明した。 さらに、性をどう考えるかということにも話を広げ、人の性 は、従来考えられていたような男/女に二分されるのでなく、 多様なあり方があるということが、性同一性障害の人たちか ら示唆されるとの見方を示した。

性を巡る違和感が性同一性障害として医療の対象となっ たこと、そして、それが社会的に認知・受容されつつあるこ とは、当事者にとって非常に大きな前進である。一方で、性 同一性障害の概念とそれへの医学的・社会的対応は、一般的 に、身体の性・性の自己意識・性役割が男/女という二元的 な性別のどちらかにおいて一致するということを前提として いる。「従来考えられていたような男/女に二分できない多 様な性のあり方」を求める人々も含めて、一人ひとりの望む 性のあり方を尊重していくには、性別違和症候群の当事者へ の対応の充実と同時に、性同一性障害という問題から更に、 性別二元論や、身体と性の自己意識と性役割の関係といった 既存の性別に関する考えを問うことで、性の多様さが認めら れる社会的環境を整えていくことが重要ではないだろうか。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0508004j.html

ICU 学部生: 津島祥

#### **REPORT: Professor Ueno's Lecture**

In her lecture at ICU on May 27, 2005, Professor Chizuko Ueno (University of Tokyo) spoke of the hidden trap behind the neo-liberal concept of self-determination. If everything is viewed as a result of self-determination or self-responsibility under the principle of the survival of the fittest, then as long as competition exists between people, the gap between those who can and cannot remain in the race will continue to widen. Moreover, the competition itself is set up to be disadvantageous to particular people (here, specifically women). This trap is spread throughout society. So, what can we do about it? Prof. Ueno quoted the words of an invalid who requires 24-hour care: "I need the help of others to survive. So please help me. But does that mean that I have to do as you say? I will still make my own decisions."

I've often been unable to ask for help, even when I needed it, probably due to my unfounded belief in self-reliance. I realized that despite my antipathy, I had in fact, deep down, been a slave to the neo-liberal self-determination and self-responsibility.

The content of the lecture can be viewed online: (http://subsite. icu.ac.jp/cgs/article/0510013e.html)

> full text-> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510003e.html ICU graduate student: Naomi Suzuki

#### **REPORT: Dr. Yamauchi's Lecture**

On June 6, 2005, I attended a lecture on Gender Identity Disorder (GID), a condition in which a person's self-awareness of gender, or 'gender identity,' conflicts with their anatomical sex. The speaker was Dr. Toshio Yamauchi, President of Saitama Medical School and a man who has significantly contributed to GID treatment in Japan.

Dr. Yamauchi explained the genesis of GID and traced its history in Japan to the current situation today. He then discussed the concept of gender itself and how working with GID patients has shown him that, contrary to the traditional male/female dichotomy, gender can in fact take on many diverse manifestations.

The definition of GID as a medical disorder, as well as its social recognition, certainly marks a significant step forward for GID sufferers. Yet, the concept of GID and its treatment in the medical world and in society are both fundamentally based on the simplistic view that a person's anatomical sex, gender identity, and gender role should fit into either part of the male/ female dichotomy. We must look beyond the problem of GID and consider the complexities of the issues involved if we are to develop a social environment which truly recognizes and respects the diversity of gender.

> full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0508004e.html ICU student: Sho Tsushima

# 第14回東京国際レズビアン&ゲイ映画祭

第 14 回東京国際レズビアン & ゲイ映画祭は 2005 年 7 月 14 日 (木) から 17 日 (月) まで東京青山のスパイラルホールで行われた。

快晴の日曜日、会場の青山スパイラルホールは上映を待つ人々でラウンジがぎっしり埋まる盛況ぶりであった。来ている人々は30代くらいまでの若い人々が中心だったが、レズビアンをテーマにした短編集の上映ということもあってか、会場にはレズビアンカップルも多く見受けられた。手をつないで入場を待つカップルの中には外国人の姿も目に付き、上映前のアナウンスでも日本語の後に英語訳がつけられるなど、映画祭の国際性も垣間見られた。

ラウンジではレズビアン・ゲイを対象とした書籍などを販売するブースが並び、1ヶ月後に控えた「東京レズビアン&ゲイパレード2005」のために寄付を募ったり、HIV予防の啓発のためにコンドームを無料で配布するなど映画祭全体の熱気が感じられた。レズビアン・ゲイを対象とした性風俗店のチラシが手渡されたり、会場でいわゆる「大人のおもちゃ」と呼ばれる類の商品が販売されていたりと直接的な性表現が目立ったが、商品を売るために話しかけてくる店員や会場内の明るい雰囲気からはいかがわしさはあまり感じられなかった。

本編が終わり、レズビアン・ゲイの人々がオープンな雰囲気で談笑する、虹色のグッズやポスターでカラフルに彩られた会場から一歩出ると、外の景色がどんよりくすんで見えた。

**全文** --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510004j.html ICU 学部生:二見元気

# News from Japan

## The Tokyo International L&G Film Festival

The 14th Tokyo International Lesbian and Gay Film Festival was held at the Aoyama Spiral Hall from July 14 to 17, 2005. I arrived for the Sunday session to find the lobby packed full with mainly young people in their 20s or 30s. I also noticed many lesbian couples waiting hand-in-hand, no doubt since the short films dealt with lesbian themes. Foreign faces in the crowd and the bilingual announcements gave the event an international feel.

There was a feverish excitement in the air with many stalls in the lobby selling books geared toward a Queer readership, fund-raisers collecting for the upcoming 2005 Tokyo Lesbian & Gay Parade, and HIV-prevention campaigners handing out free condoms. There were people distributing leaflets advertising gay and lesbian sex shops and selling a variety of sex toys. Sex was certainly out in the open. Yet, the general atmosphere of the event was more lively than indecent or questionable.

After leaving the hall, which had been so brightly decorated with rainbow-coloured goods and posters and alive with the talk and laughter of an audience so open about their sexuality, the streets outside seemed to pale in comparison.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510004e.html ICU student: Genki Futami

# 日本女性学会

2005 年 6 月 11・12 日の 2 日間にわたって行われた日本 女性学会年次大会の開会プログラムとして「フェミニズムと戦争―『銃後』から『前線』への女性の『進出』!?を踏まえて」と題したシンポジウムが横浜国立大学で開催された。

パネリストの佐藤文香さん、海妻径子さん、岡野八代さん、そしてコーディネーターの千田有紀さんは新進気鋭の若手研究者。会場には女性学会の会員を中心にさまざまな分野の参加者が集まり白熱した議論が展開された。シンポジウムでは、「戦争/軍事的行為の直接参与者」である女性をとりまく、その現状が報告された。かつて女性は「銃後」の存在であり、戦場に赴くのは『看護婦』や『従軍慰安婦』に限られていたが、近年女性は男性と「平等」に兵士として「前線」に「進出」するようになった。女性が国家による暴力機構の一翼を担うとはどういう意味合いを持つのか。考えずに避けて通れぬ課題である。

パネル報告後のディスカッションは、特に、ドメスティック・バイオレンスにおける警察の介入など、市民の安全を守るために必要な国家権力と、国家の安全保障のために発動される国家権力を、ジェンダーの視点からどのように考えるかに焦点があてられ、活発なディスカッションが行われた。参加者はそれぞれの立場から真摯な姿勢で発言し、暴力から被害者を守るためには、国家権力でも利用するという切実な声も聞かれた。目の前で起きている暴力に対抗するために利用する国家権力と、軍隊などの国家権力のあり方を問うことは異なるレベルの議論だが、そのどちらに対しても真剣に向き合っていく必要性を強く感じた。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510006j.html

ICU 学部生: 金子活実

#### **Women's Studies Association of Japan**

The annual convention of the Women's Studies Association of Japan (June 11-12, 2005) opened with a symposium at Yokohama National University on "Feminism and War – Women advancing from the home front to the battle line?!"

The panelists and co-ordinator were young, energetic researchers and participants were mainly WSAJ members from a range of fields. Reports detailed the current reality of women directly involved in war and military activities. Once present only on the home front (with the exception of 'comfort women' and nurses), women have now 'advanced' to the battle lines as soldiers on an equal footing with men, forcing us to consider the implications of their participation in organized state violence.

The lively debate which ensued focused on questions from a gender perspective regarding the necessity of state force for the protection of its citizens (particularly the issue of police intervention in domestic violence cases) as opposed to that which is exercised for national security. In my opinion, the two issues are on an entirely different footing, but I also felt that both need to be addressed with equal consideration.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510006e.html ICU student: Ikumi Kaneko

# 東京レズビアン&ゲイパレード 2005

2005年8月13日、東京・ 代々木公園周辺で東京レズビ アン&ゲイパレード 2005 が 開催された。私は、HIVとエ イジングに関するシンポジウ ムに参加した後、実際にゲイ、 レズビアン、トランスジェン ダー、その他様々な性を生き る人々と共に沿道を歩いた。 パレードに対する沿道の人々 の反応は様々であったが、自 分たちの意見をスローガンと して掲げて車道を一緒に歩く ことに大きな意味があるとわ かった。私は今回パレードに



Parade ①



Parade (2)

参加して、参加者がパレードに参加す ることで大きなパワーをもらってい ると体感できた。今の日本では、ゲイ やレズビアンが身近な存在として意 識されにくい。誤解を生むような昨今 のメディアのあり方など、問題意識を 持って考えていかなければならない と改めて実感した。彼らが自分にとっ ていかに身近な存在か、私は今後、文 章や会話を通じて人々に伝えていき たいと思った。



Parade 3

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510005j.html

慶応大学:山下嘉恵

# 大阪府議がカミングアウト

大阪府議である尾辻かな子さん が、8月に出版した著書『カミン グアウト』の中で、自らがレズビア ンであることを公表した。彼女は 2003 年の統一地方選挙で初当選し た、大阪府議会で活動中の現役最年 少議員。同性愛者であることを公言



した議員は彼女が国内初であり、国内の政治でその存在を無 視されている同性愛者たちにとってのインパクトは計り知れ ない。彼女が素晴らしいのは、言葉だけでは終わらずに行動 に移すところである。まず、出版直後に行われた東京レズ ビアン&ゲイパレード 2005 に参加し、性的少数者の権利擁 護を訴え、渋谷の街を練り歩いた。そして 10 月には府議会 の代表質問に立ち、同性パートナーも親族と同様に入院中の 患者への面会や情報提供を求めることができないのかと質問 し、前向きな回答を得た。また、原則として親族同士の入居 しか許されていない大阪の公営住宅において、住居の確保に 困る同性カップル等の入居許可を求め、府住宅供給公社の担 当者に来年度早期から賃貸許可に乗り出す方針を引き出させ た。同種のハウスシェアリング制度は都市再生機構で例はあ るが、当初から同性カップルの利用を念頭に置いたものとし ては史上初であり、公的機関による初の同性パートナーシッ プの権利保障政策と位置づけることができるだろう。彼女も 他の性的少数者同様、家族との関係や学校での差別に悩んだ 経験を持つという。また、議員という立場でのカミングアウ トには支持者離れが懸念される。そんな逆境の中、着実に成 果をあげ、国内の同性愛者たちをエンパワーメントし続ける 彼女を、これからも応援せずにはいられない。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510007j.html

ICU 学部生:清水雄大

# 2005 Tokyo Lesbian & Gay Parade

On August 13, I participated in the 2005 Tokyo Lesbian and Gay Parade. I attended symposiums on HIV and ageing, and then marched the city streets alongside people of different sexualities - gay, lesbian, and transgender.

The reactions of the spectators we encountered on our way varied, but participating in the parade was a most rewarding experience for me. It taught me how meaningful a parade can be, through marching the streets together and disseminating one's opinions in the form of slogans. I also experienced firsthand the feeling of empowerment which a parade like this can give its participants.

In Japan today, gays and lesbians still tend to be regarded as an alien species. There are many issues to be addressed, such as their recent treatment in the media which has given rise to misrepresentations and misconceptions. Through writing and dialogue, I hope to help inform the public and increase better understanding of sexual minorites in Japan.

#### **Osaka Politician Comes Out**

Osaka councilor Kanako Otsuji became the first politician in Japan to publicly announce her homosexuality with the release of her book "Coming Out" in August 2005. This had great impact on the Japanese Queer community, which has long been ignored in the political sphere.

Admirably, Otsuji is not just talk. She marched the streets of Shibuya in the 2005 Tokyo Lesbian and Gay Parade, appealing for the rights of sexual minorities. At the October session of the Osaka prefectural assembly, she raised the issue of equal visiting rights and information disclosure for gay and lesbian partners of hospital patients. She also pushed for the rights of gay and lesbian couples to public housing, forcing the Osaka Prefectural Housing Corporation to revise their regulations by 2006, making it the first public policy in Japanese history to explicitly protect the rights of gay and lesbian couples.

Like other sexual minorities, Otsuji has suffered the pain of discrimination herself. Moreover, she risks her career to speak out for others. Her steady achievements in the face of adversity continue to empower sexual minorities throughout the nation.

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510007e.html

ICU student : Yudai Shimizu

# アジアからのニュース

# アジア太平洋 HIV 会議 & アジアクィア学会

2005年7月、アジアにおいて性/セクシュアリティをテーマとした国際会議が2件開催された。一件は神戸で7月1~5日に開催された第七回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(通称、神戸会議)であり、もう一件はタイのバンコクで7月7~9日に開催された第一回アジア・クィア国際会議(通称、クィア学会)である。

5日間に及んで開催された神戸会議は、1994年の横 浜会議に引き続き、日本で行われる2回目のエイズ会議であ る。この会議の特色は何より、セブンシスターズと呼ばれる アジアにおけるそれぞれの当事者を代表する7団体が運営 に関わり、各コミュニティの声を反映する試みが積極的に行 われている点である。セブンシスターズの構成員は、ドラッ グユーザー (AHRN, アジア・ハームリダクション・ネットワー ク http://www.ahrn.net)、セックスワーカー(APNSW, ア ジア太平洋セックスワーカー・ネットワーク http://apnsw. org)、医療従事者・研究者(ASAP, アジア・太平洋エイズ 学会 http://www.asaap.ca)、患者・感染者(APN+, アジ ア太平洋 HIV 陽性者ネットワーク http://www.gnpplus. net/cms/index.php?topic=Asia and Pacific)、移動労働 者(CARAM-Asia, エイズと人口移動に関する行動調査調整 機構 http://caramasia.gn.apc.org)、セクシュアル・マイノ リティ(AP-Rainbow, アジア太平洋レズビアン・ゲイ・バ イセクシュアル・トランスジェンダー・ネットワーク)、そ してエイズ関連NGO (APCASO, アジア太平洋エイズ・サー ビス組織評議会 http://www.apcaso.org)。このように広範 囲にわたる当事者を代表するグループが緩やかにネットワー クを持ちながら協同し、現場の声を汲み取れる仕組みを併せ 持った会議は他になかなかないのではないだろうか。参加者

# News from Asia

#### The Kobe Congress & The Queer Conference

In July 2005, I attended two international events pertaining to the themes of gender and sexuality - the 7th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific held in Kobe, Japan (The Kobe Congress, July 1-5) and the 1st International Conference of Asian Queer Studies held in Bangkok, Thailand (The Queer Conference, July 7-9).

The five-day Kobe Congress was the second AIDS convention to be held in Japan following the Yokohama Congress in 1994. The uniqueness of this event lay in its concerted attempt to give voice to a diverse range of people, by bringing together the so-called "Seven Sisters" in Asia, organizations which represent different groups concerned with AIDS: drug users (Asia Harm Reduction Network, AHRN); sex workers (Asia-Pacific Network of Sex Workers, APNSW); health personnel and researchers (the Asian Society of AIDS Pursuers, ASAP); AIDS patients and sufferers (AIDS Patients and HIV Positive Network, APN+); migrant workers (Co-ordination of Action Research on AIDS and Mobility, CARAM-Asia); sexual minorities (Asia Pacific Network of Lesbians, Gays, Bisexuals and Transgenders, AP-Rainbow); and AIDS-related NGOs (Asian Pacific Council of AIDS Service Organizations, APCASO). There were over 4,000 participants from

も国内外から4000名以上を越えた。

バンコクで初めて開催されたクィア学会は、600名 近い参加者を迎え、多くの研究報告が行われた。報告だけで なく、華やかなオープニング・レセプションやオプショナル・ ツアーなどもあり盛り上がった。アジア太平洋地域において セクシュアリティに関わる初の学会ということで、前述の神 戸会議やその他の国際会議にはさまれた条件の悪い日程なが ら、充実した3日間だったように思う。

今回私が出席した両会議は特にアジア・太平洋圏に焦点 を当てた地域会議であった。この双方に参加し感じたことは、 アジア太平洋地域における独自の支援・ネットワーク・研究 活動の重要性と、アジア太平洋地域内部における差異への着 目・配慮の重要性である。神戸会議・クィア学会双方に参加 していたネパールの HIV/AIDS 予防及び人権保護団体 Blue Diamond Society の事務局長である Sunil Babu Pant さん は神戸会議において、セックスワーカーやゲイ、レズビアン、 トランスジェンダーなどに対する警察による日常的なリンチ やレイプなどの暴力行為に対して、緊急かつ根本的な取り組 みが必要だと訴えていた。また目に見える暴力被害がなくと も、解決しなければならない構造的な問題は存在する。グロー バル化が進展する中で、アジア各国においてNPOや研究者 のネットワークを築き、協力しあうことの重要性は確実に高 まっている。当事者の体験や実状を共有する機会としてこれ らの会議は非常に大切な役目を果たしていることは間違いな

> **全文** --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510008j.html 首都大学大学院: 大河原麻衣

Japan and abroad.

The Queer Conference had around 600 participants. It was a dynamic event with many research reports, a festive opening reception, and optional tours. Despite the scheduling inconvenience of being sandwiched between the Kobe Congress and other international events, I felt that it was an extremely rewarding three-day experience, being the first academic conference on sexuality in the Asia-Pacific region.

The two events made me aware of the need for countries in the Asia-Pacific to develop their own network for co-operation and research. It also highlighted the importance of appreciating differences within the region. At the Kobe Congress, the executive director of a human rights organization and HIV/ AIDS prevention group in Nepal, Sunil Babil Pant, appealed for fundamental reform to prevent daily police violence against sex workers and sexual minorities. There are also less visible institutional problems to be addressed. In the age of globalization, there is a growing need to build a strong cooperative network of NPO's and researchers in the Asia-Pacific region. These two congresses played a vital role by providing an opportunity for the sharing of experiences and perspectives.

**full text**—> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510008e.html Tokyo Metropolitan University graduate student: Mai Ogawara

## 世界女性会議

2005年6月19日から25日まで、韓国・ソウルの梨花 女子大学において世界女性会議(Women's Worlds 2005) が開催され 2300 人強が参加した。1981 年イスラエルのハ イファで開催されたのを皮切りに世界各地で3年に一度開 かれてきたが、9回目において初めてアジアで開催が実現し た。今回 CGS から教員 3 名・学部生 4 名・院生 2 名・副手 1名が参加した。CGS は 23 日に "The Future of Women's Network in Asia: Academia and Beyond" という題で分科 会を持ち、昨年度開催した国際ワークショップの報告と今後 の展望を、多数の参加者と共に討議した。参加した学生はそ れぞれの問題意識を持ってセッションに参加し、帰国後報告 会で成果を発表した。会議は、朝一番に全体会があり、その 後さまざまな分科会が、午前一回、午後三回、二十の会場で もたれた。分科会は研究や発表からワークショップまで多岐 にわたり、映画の上映や演劇、パフォーマンス、ダンスの公 演がキャンパスのあちこちで催された。全体的には好意的



WW05

に受け止められた会議であったが、一部では、多くの企業が協賛していることや、フェアウェルパーティーでファッションショーが開催されたことに対して女性学の商業化ではないかといった声も聞かれ

た。次回の世界女性会議は 2008 年スペインのマドリードで 行われる。批判的な意見も含め次回の会議にどのように臨む か真摯に考える時期に来ているのであろう。

尚、参加学生のレポートを下記のアドレスにて公開して いますので是非ご覧ください。

全文--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510009j.html

ICU 大学院生: 平野遼

## 映画評:結婚の贈り物

2005年9月18日、ICUで開催された「アジアン・フィルム・ ショーケース」にてイ・ジョンファ監督作品「結婚の贈り物」 が上映された。監督は、大学院卒業後ドキュメンタリーや子 供番組の脚本家として活躍。現在、在日韓国人の男性と結婚 し韓国で生活している。日本ではなぜ大きい男性用、小さい 女性用の夫婦茶碗があるのか?監督のこの疑問が映画の出発 点だ。この映画で彼女は、至極日常的に使われている夫婦茶 碗をめぐる政治に日本人の性差意識を探った。この映画を通 して私は、日本人、特に女性が、性で差をつけることを伝統 によるものだと思い込み、自ら性的区別を受け入れてしまっ ているという事に気づいた。夫婦茶碗はいつから始まったの だろうか?江戸時代頃かと思いきや、実際は 1970 年台頃か ら定着したという。夫婦茶碗の発祥についての人々の認識と 実際のずれが示すのは、いかに私たちが理屈に合わない事を 「伝統」の一言で済ませてしまっているかということである。 「女性は男性より一歩引くという『日本の美』の表れ」「夫が 働きに出ている間、家で楽ができることに比べれば些細な 事」、二人の女性が夫婦茶碗の大小の差についてこのように 述べた。聞かれて答えたまででしっかり考えた結果ではない かも知れない。しかし、今日の女性のこのような考え方から は、自分にとって不利な男女差を無意識に受け入れてしまっ た女性自身が垣間見える。さらに言えば、実際の社会では男 女平等は理想論に過ぎず、性的分業に従うしかない、といっ た一種の諦めを呈した考えを女性は持っているのかもしれな い。伝統と女性自身の意識、時間はかかるであろうが、日常 の些細なことに潜む男女差別に、私達はきちんと向き合わな ければならない。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510010j.html

ICU 学部生: 外山容子

## Women's Worlds 2005

Women's Worlds 2005 was held from June 19-25 at Ewha Woman's University in Seoul, Korea. There were over 2,300 participants. It was the ninth meeting of this international congress and the first in Asia since its inception in Israel in 1981. Three CGS professors reported on last year's International Workshop and discussed future research perspectives at a session entitled "The Future of Women's Network in Asia: Academia and Beyond". Eight ICU students also attended the conference.

Each day, participants assembled for a morning plenary session before breaking up for a varied programme of sub-sessions which included academic presentations and reports, film screenings, theatrical, music and dance performances, and workshops. The overall response was positive, despite some voices of concern about the commercialization of women's studies implied by the substantial company sponsorship and the fashion show at the farewell party.

For those of us who participated, it is now time to consider our future direction in light of the issues raised this year, so that we can prepare for the next conference which is scheduled for 2008 in Madrid, Spain. Reports by participating students can be viewed online:

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510009e.html

ICU graduate student: Ryo Hirano

#### **FILM REVIEW:** Wedding Gifts

The film Wedding Gifts was screened at ICU's "Asian Film Showcase" on September 18, 2005. Director Jung Hwa Lee studied at graduate school in Korea and then worked as a TV scriptwriter. She currently lives in Korea with her husband, an ethnic Korean from Japan. Her film explores the politics of gender distinctions in the Japanese subconscious through the seemingly everyday phenomenon of matching teacups for couples. Why is the larger cup for the man and the smaller one for the woman? I realized that women in particular accept gender distinctions under the mistaken assumption that they are a part of tradition. Paired teacups may appear to have a long history, but in fact only took root in the 1970s. This reflects the gap between consciousness and reality - how we neatly package things under the label of tradition when they don't fit into our logic. The film illustrates how women unconsciously accept their own inferior position in the male/ female hierarchy. In reality, the concept of gender equality is merely an ideal and women seem to believe that they must comply with the role assigned to their sex. We must continue to confront the sexual discrimination which can underlie even the most trifling everyday phenomena.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510010e.html

# 法曹とジェンダーのあいだ

『ジェンダー法学』という分野をご存知だろうか。学問としての歴史はまだ浅く、2003 年 12 月に「ジェンダー法学会」が発足したばかりだ。司法制度改革の一環として 2004 年度からスタートした法科大学院の一部には、ジェンダー法学を扱う科目が設置された。このコラムでは、法科大学院でジェンダー法学を学ぶ者として、外部からはあまり見えない法科大学院とジェンダーの関係や、ジェンダー法学の授業内容について述べたい。

現在、法科大学院においてジェンダー法学の教育は十分なされているとはいえない。全国の法科大学院 74 校のうち、ジェンダー法学の科目があるのは 18 校、全体の 24 パーセント強に過ぎない。つまり約 7 割の法科大学院ではジェンダー論に触れる機会がない。またジェンダー関連の科目が開講されている大学院においても学生のジェンダーに対する問題意識が高いとはいえない。ジェンダー系科目が必修ではないこと、司法試験の出題範囲外であることなどが履修者数が少ない一因となっている。さらにいえば教員も学生達もジェンダー法学が将来の法曹としての活動に必要だと思っていないからだ。ジェンダー法学関係者は、もっとジェンダー法学の必要性を主張していかなければならない。ジェンダー教育や法科大学院制度をジェンダー主流の視点から改善していくことが、ひいては日本の法律界・法曹界がジェンダーバイアスを克服していくことにつながるのではないだろうか。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0509001j.html 明治大学法科大学院: 名取克也

# 前号掲載の記事についての往復書簡

2005 年 4 月発行 CGS ニューズレター 3 号に掲載された 吉成愛子さん(ICU 卒業生)の記事『タイ・フィリピンの旅 行産業と性産業』について、フィリピンに在住する小林武生 さんから CGS 編集部宛にメールが届いた。小林さんは、日 本のフィリピンクラブの店長やフィリピン人芸能人プロダク ション勤務を経て、現在フィリピンで生活している。吉成さ んは、3週間訪れたフィリピンとタイにおける「旅行産業と 性産業」の実情を CGS オンラインに掲載する記事としてま とめた。小林さんは、この記事の情報がフィリピンの一部に 限定された偏った情報である点をあげ、性産業が栄えている という偏った情報は、フィリピンのマイナスイメージにつな がると意見した。二人の議論はフィリピンの現状についてさ まざまな点から展開され、多くの情報が引き出された。吉成 さんが第三世界における旅行産業の中に性産業が「経済的搾 取」の構造で組み込まれてしまっていることに問題意識を置 くのに対し、小林さんは、フィリピンで生活する側からみた 現地の状況に焦点を当てている。立場の違いから若干の齟齬 はみられるものの、往復した書簡からは結果的に多くを得た。 編集部では小林さんと吉成さんの間を中継し、数回にわたる 書簡のやり取りとその全文を、お二人の許可を得て CGS オ ンラインで公開する。

CGSでは、記事に対するご指摘・ご批判を歓迎します。 頂いたご意見は編集部を通して執筆者に伝え、責任を持って お応えする所存です。

ご意見ご感想お待ちしております。

全文--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510011j.html

CGS 編集部

# Column

#### **Gender and the Legal Establishment**

Gender Law is still a young academic discipline and the Japan Association of Gender and Law was only recently founded in December 2003. Gender Law courses have been incorporated into curriculums of the Graduate Law Schools started as part of the national judicial system reforms in 2004.

As a graduate law student myself, I feel that Gender Law education in the system is still grossly inadequate. Only 18 of the 74 law schools in Japan offer Gender Law courses, and even students there have little awareness regarding gender issues. The number of registrants for gender-related subjects is low because these courses are not compulsory and also because Gender Law is not within the scope of the National Bar Examination. In fact, neither professors nor students see the necessity for Gender Law in their future legal career. Reforming gender education and the law school system with a focus on mainstreaming gender would correspondingly help to overcome the gender bias in the Japanese legal system and legal profession .

#### **Debate over Tourism and the Sex Industry**

The editors recently received an email from a long-term resident of the Phillipines, Mr. Takeo Kobayashi, regarding the article 'Tourism and the Sex Industry in Thailand and the Philippines' (CGS Newsletter, vol. 3, April 2005). The article was written by ICU graduate Aiko Yoshinari after a three-week stay in both countries. Before moving to the Phillipines, Mr. Kobayashi worked as a manager in a Filipino night club and as an agent for Filipino entertainers in Japan. He claims that the article creates a negative image of the country by giving the impression that the sex industry flourishes nationwide based on examples which are in fact limited to a specific area. The ensuing debate mediated by the editors, has proven to be very fruitful. While Ms. Yoshinari focuses on the economic exploitation inherent in the way the sex industry is built into the Third World travel industry, Mr. Kobayashi speaks from the viewpoint of a resident in the country. Full transcripts of their debate will be available on our website.

CGS welcomes any comments or criticisms regarding the articles published on CGS Online. We eagerly await your feedback.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0510011e.html

CGS Editorial Committee

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0509001e.html Meiji University Law School student: Katsuya Natori